

第3章 西予市の歴史文化の特徴

1. 西予市の地域区分

第1章、第2章で概観した西予市の自然的・地理的環境、産業、歴史的背景、文化財の特徴から、西予市全体をうみ（明浜、三瓶）、さと（宇和）、やま（野村、城川）の3地域に区分し、次節からこの地域区分に従って記載します。

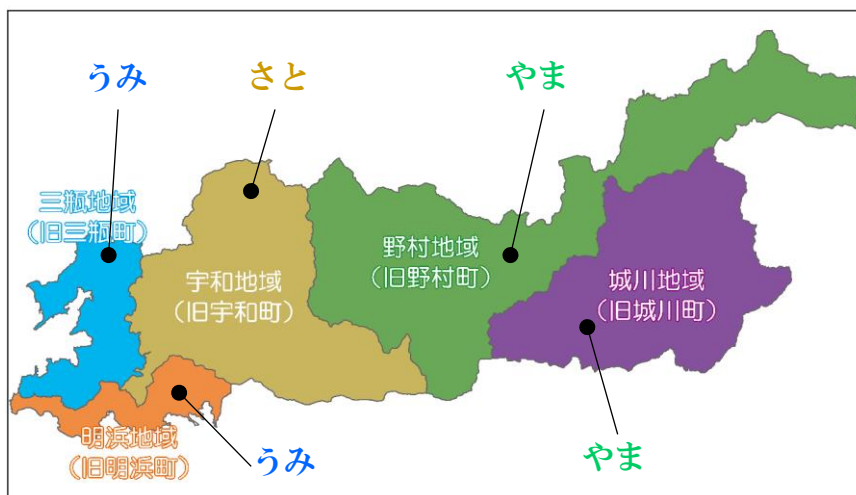


図19 本計画における地域区分（『西予市都市計画マスタープラン』より引用・加筆）

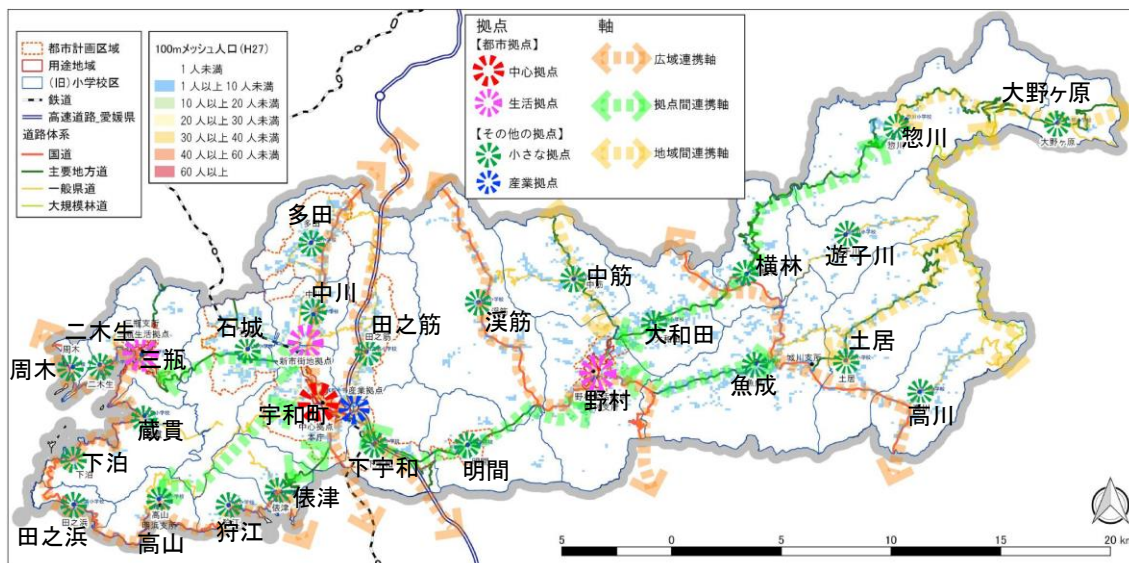


図20 市内の旧小学校区の分布

（『西予市都市計画マスタープラン』より引用・加筆）

2. 歴史文化の特徴の抽出

西予市では、おおむね各公民館（旧各小学校区）単位で小規模多機能自治へ移行することから、その単位で、先史から現代までの歴史や文化を「生活・生業・産業」、「交流・交易・交通・通信」、「信仰・祭り・芸能・教育・文化」、「自然・災害・疫病・戦争」の4つの分野に分けて概観し、巻末資料5のように各旧町ごとに整理しました。その内容と、第1章、第2章の内容、前節に示した地域区分を踏まえ、下表のとおり西予市の歴史文化の特徴を抽出しました。そして、その内容をそれぞれ3つずつの歴史文化で説明することとします。

表10 西予市の歴史文化の特徴

地域区分	歴史文化の特徴	内容（歴史文化）
うみ	宇和海リアス海岸地帯の人々の営み	(1) 宇和海沿岸の農漁業と交流
		(2) 地質と地形を活かした石灰産業
		(3) 人々をつなぐうみの祭り
さと	南予の中核・宇和盆地	(4) 南予を代表する初期稲作文化と古墳文化
		(5) 西園寺氏による宇和郡の支配
		(6) 交通の要衝・宇和盆地
やま	山間地農業と茶堂のある農山村	(7) 山間部の農業と手工業
		(8) 伊予と土佐の交流
		(9) 農山村の祈り

3. 西予市の歴史文化の特徴

歴史文化の特徴(地域:うみ)

宇和海リアス海岸地帯の人々の営み

概要 宇和海沿岸の漁業の好不漁を補う斜面地農業が展開する中で、地形や地質を活かした独特の段畑^{だんばた}景観が形成されました。高山や三瓶など一部では工鉱業化が進展し、町の発展を促しました。荒ぶる牛鬼が特徴の祭りは、地域の紐帯となっています。

地域：うみ／歴史文化の特徴：宇和海リアス海岸地帯の人々の営み

■ (1) 宇和海沿岸の農漁業と交流¹

四国西南部に位置する宇和海沿岸では、リアス海岸の入江湾奥の狭小な扇状地に集落が営まれました。縄文時代の釣針や、平安時代以来宇和郡に設置された賀茂御祖社の御厨^{みおやしや みくりや}²「宇和郡六帖網」の存在などから、古くから沿岸での漁撈（漁業）が生業の中心であったと考えられます。鎌倉時代末期に立間郷をはじめとする諸郷の庶務をつかさどった開田善覚も、法華津湾を拠点に活躍した海の民でした。また、明浜の五輪塔などの中世石造物には、阿蘇溶結凝灰岩製や花崗岩製のものがあり、当時の宇和盆地や佐田岬半島の石造物からも、九州豊後や瀬戸内方面との海を介した活発な交流があったことがうかがえます。

近世には鰯網漁が盛んで、鰯^{あじろ}と呼ばれる漁場で漁が行われ、住民の大半が網子として漁業に従事しました。鰯を干した干鰯（干鰯^{ほしか}）は、肥料として綿栽培の盛んな上方に販売され藩の重要な財源となったため、宇和島・吉田両藩とも漁業の保護・統制を行いました。沿岸部での農業は、水が得られる谷筋などで稲が栽培されましたが、斜面地の大半では麦、甘藷、藩が奨励する櫛などの栽培が行われました。当時、山林は材木の伐採、山菜や薪炭、肥料の採取など生活の場として重要であったことから、隣接する村浦の間でしばしば境界争論が発生し、宇和島藩では地形模型などを利用して解決に乗り出しました。

近代には明治期の不漁もあって、狩江、垣生などで木綿織りが盛んになり、狩江縞、垣生縞、朝立縞などの名で知られた木綿織を、九州や土佐等の山間部で行商し現金収入を得ました。明浜では明治後半頃から養蚕が盛んになり、集落ではオリア養蚕³、養蚕小屋⁴、桑納屋などの養蚕関連施設が整備されました。斜面地では、蚕の餌である良質な桑を栽培するために段畑の石垣化が進み、石積みによる段畑景観が形作られていきました。戦時中、桑は引き抜かれ麦や甘藷が栽培され、戦後は甘藷の切干しが作られました。

一方、三瓶では、対馬近海や東シナ海、台湾近海での突棒漁（マグロ）、土佐沖での天秤釣（サバ）、韓国巨済島でのイワシ漁、カムチャッカ沖でのサケ漁など、近海や遠洋漁業を

¹ 愛媛県生涯学習センター編 1993『宇和海と生活文化』同センター、宮本春樹 2006『イワシからのことづてー一段畑とイワシからのことづて』(上)(下)創風社出版、西予市教育委員会編 2018『西予市文化的景観調査成果報告書』西予市教育委員会、愛媛県歴史文化博物館編 2018『古地図で楽しむ伊予』風媒社などを参考にしました。このほか本章では、愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史』愛媛県や西予市内の旧町村誌、文化財調査報告書などを参考にしています。

² 神饌を貢進するための領地。

³ 住居兼蚕室の建造物。おりやようざんと読む。

⁴ 養蚕専用の建造物。ようざんごや。

第3章 西予市の歴史文化の特徴

行う者が出てきました。海岸部から宇和へは魚肥や海産物が、宇和から海岸部には米や繭、木蠟、甘藷、木材などがもたらされ豊後や大阪方面へ移出され、大正6年（1917）竣工の三瓶隧道など交通路の整備が図られました。また、埋め立てや港湾の改修が進められたほか、工業用水が得られる地の利と安い労働力を活かして、大正8年の三瓶織布株式会社設立、昭和4年（1929）の八幡浜紡績工場の移転（翌年に近江帆布として創業）など工業化が進み、商店街や住宅地などの形成、町の発展につながりました。両地域とも昭和30年代からは、斜面地での柑橘栽培と沿岸での養殖業、シラス漁などに転換していきました。

宇和海沿岸での漁業を中心にしながら、好不漁の波を斜面地農業や木綿織、養蚕、紡績、遠洋漁業などで補いながら生活を営んできた人々の暮らしを伝える歴史文化です。



宇和海狩浜の段畑と農漁村景観（重文景）



地福寺大般若経（市指定）



狩江縞を織った高機



木彫りの立体地図（市指定）



漁具



箸の手の鯨塚（市指定）



三瓶隧道（国登録）



極山裁定絵図及び裁定書（市指定）

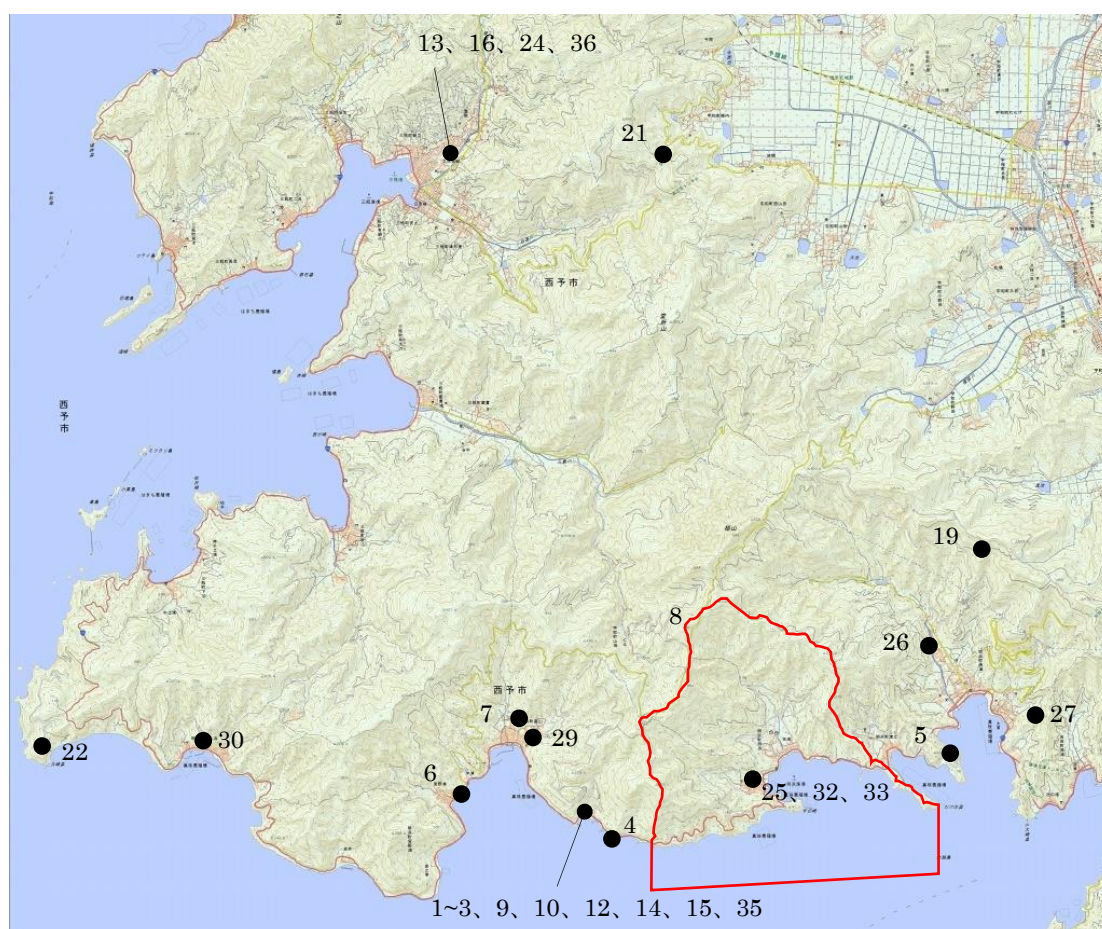


図 21 主な文化財の分布（番号は巻末資料 6（1）に対応）

地域：うみ／歴史文化の特徴：宇和海リアス海岸地帯の人々の営み

■ (2) 地質と地形を活かした石灰産業⁵

⁵ 田中貞輝 2009『宇和島藩領高山浦幕末覚え書』創風社出版、宇都宮長三郎 2015『高山石灰産業史』、角田清美 2017「愛媛県明浜町の石灰工業史」『専修人文論集』101、愛媛県生涯学習センター編 2018『愛

明浜西部の高山浦は鰯網漁と斜面地農業が特徴的な農漁村で、文政11年(1828)岩井で石灰を焼いていたとの記録があり、原初的な木炭焼きが行われていたと思われます。嘉永3年(1850)土佐で石灰焼きを学んだ宇都宮角治が小僧都こそうずに窯を築いて、本格的な石灰生産を始めました。翌年にはすでに他の村浦へ搬出するほどで、元治元年(1864)の台風被害報告には、石灰窯や石灰、俵、塩、炭、菰等の流出、石漕船の被害などが報告されています。慶応2年(1866)には積み出し先に土佐や上方があり、慶応頃には石灰や炭の運送、問屋の出現、縄や菰作りなど周辺の仕事も見られるなど、地域の産業となりました。

明浜町宮野浦岩井の石灰窯は、周辺の石灰窯と比べると小規模で、窯は窯玉と呼ばれる粘土を積み上げて作ったもので、市内で唯一の明治初期の木炭焼成窯と考えられています。高山では明治5年(1872)には北九州から石炭(煽石)を導入しており、これに伴い石灰窯は大型化していきました。明治16年(1883)に浅野総一郎⁶が生石灰調達のため来村し、明治22年(1889)には高山の工員約20名が東京青梅で石灰窯を造成したとされます。明治29年(1896)には高山石灰製造組合、翌年には伊予高山銀行が設立されました。明治45年(1912)の石灰窯の数は、休業中のものも含めると100基を越え、年間の生産高は418.3万俵、船舶数は32隻を数えました⁷。当時の石灰の搬出先には北海道、越後、越中、能登、因幡、大阪、播磨、阿波、讃岐、土佐、周防、豊前、豊後、日向、薩摩、朝鮮半島(馬山、釜山等)、阪神、播州、日向などがあり⁸、用途は肥料70%、建築工事用25%、工業用5%でした。大正期以降は、化学肥料の大量生産による販売不振や太平洋戦争⁹などの影響を受けました。戦後は特需や岩戸景気もあり復興を遂げましたが、昭和57年(1982)に終焉を迎えました。

この間、高山の人口は明治23年(1890)で3,769人、昭和25年(1950)には6,154人と大きく増加したこともあり、商店、醸造業、旅館、映画館(娯楽施設)などの都市施設が作られたほか、後背農地を宅地化するなどして高密度な町並みが形成されました。

土佐から学んだ技術をもって地元で産出する石灰岩を加工し、海と山が隣り合うリアス海岸の地の利を活かした産業によって町の発展につなげ一時代を築いた地域の歴史文化です。地形や地質を生かした産業に関わる文化財は、四国西予ジオパークにおいても地域の産業史を伝える文化サイトとして位置づけられています。

媛、昭和の記憶 ふるさとのくらしと産業 13-西予市①-』愛媛県教育委員会、高山地区景観調査委員会編 2022『西予市明浜町高山 景観調査報告書』高山よいとこな会などを参考にしました。

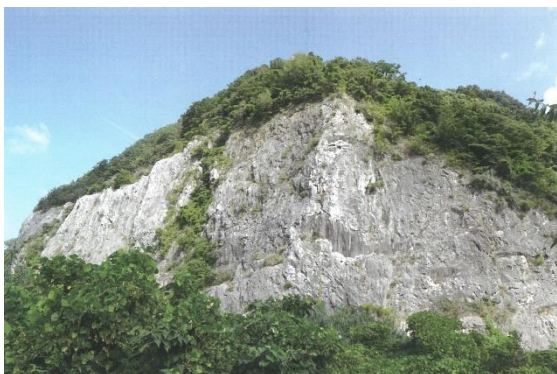
⁶ 浅野セメント創始者。

⁷ このほか、近代の溪筋村では、各部落で石灰石を掘り出し石灰を精製したとされ、鳥鹿野では直営工場が稼働し村内の需要に充てられました。魚成村や高川村(城川)でも自家用石灰が生産されました。

⁸ 石灰運賃として、阪神行2銭5厘、播州行2銭2厘、日向行2銭、朝鮮釜山行3銭5厘とあります。日本海や北海道方面への流通には北前船が寄与したと思われます。

⁹ 昭和13年(1928)石灰が統制品になったほか、人手不足、鉄材の供出、機帆船の徴用等の影響がありました。また焼夷弾により全焼した石灰窯もありました。

第3章 西予市の歴史文化の特徴



大早津鉦山



岩井の石灰窯



石炭焼成の石灰窯



石灰関連道具（明浜歴民）



賀茂神社拝殿



賀茂神社常夜灯（市指定）



河童の狛犬（市指定）



高山の町並み

第3章 西予市の歴史文化の特徴



図 22 石灰窯の分布 (愛媛県生涯学習センター編 2018 より)



図 23 主な文化財の分布 (番号は巻末資料 6 (2) に対応)

地域：うみ／歴史文化の特徴：宇和海リアス海岸地帯の人々の営み

■ (3) 人々をつなぐうみの祭り

宇和島藩領と吉田藩領では、仙台伊達藩の影響を受けた鹿踊りに加え、牛鬼や神輿などが練り歩く祭りが特徴的です。西予市の海岸部では、御旅所や辻で激しく回転したり見物客を追い回したり、四つ太鼓とぶつかりあう荒ぶる牛鬼が祭りの花形として知られます。

明浜町高山賀茂神社の宵宮では、牛鬼や神輿のかき手たちなどが、ふんどし一つで何度も海に飛び込み身を清める潮垢離がよく知られています。明浜町狩浜春日神社の牛鬼や神輿、五つ鹿、巫女などの練りは、浜からシラス漁や真珠養殖の家々の船に乗って海上渡御をします。また、鯛網になぞらえ大漁旗などで飾りつけた渡江の竹網、お船練りなども海や漁業にまつわるもので海沿いならではの民俗文化財です。市域では三瓶のみに見られる唐獅子は西宇和や宇和島に繋がっています。こうした様々な練りが出る秋祭りは、地域住民の結束を高めるものと位置付けることができます。

このほか西予市には県内に5座ある文楽（人形浄瑠璃）のうち、明浜に俵津文楽、三瓶に朝日文楽の2座が明治期から活動しており、現在も合同公演や祭りなどで披露するなど熱心な活動を行うとともに、地元の学校と協力して後継者育成に努めています。

漁業の神としても信仰された宇和島和霊神社の大祭は秋祭りに次ぐ楽しみであり、かつては漁船に屋形を設け大漁旗を立てるなど飾り立てて、宇和島に向かいました。

過疎化が進むなか地域のまつりや行事の存続は危機に立たされていますが、一方でまつりや行事は地域の紐帯でありかつ地域外の人々との交流の機会を生み出すものでもあり、毎年のように市外から訪れる人もいます。牛鬼や練り、潮垢離など、荒々しくも人を引き付けてやまない宇和海沿岸部ならではのまつりや行事を守り伝える人々と、そこに参加し楽しむ人々が交流する姿を見ることができます。



牛鬼（狩浜）



賀茂神社宵宮の潮垢離（市指定）

第3章 西予市の歴史文化の特徴



海上渡御



渡江の竹網 (市指定)



渡江歌舞伎くずし盆踊り (市指定)



朝立の秋祭り (市指定)



俵津文楽 (県指定)



朝日文楽 (県指定)



蔵貫の唐獅子



周木の盆踊り

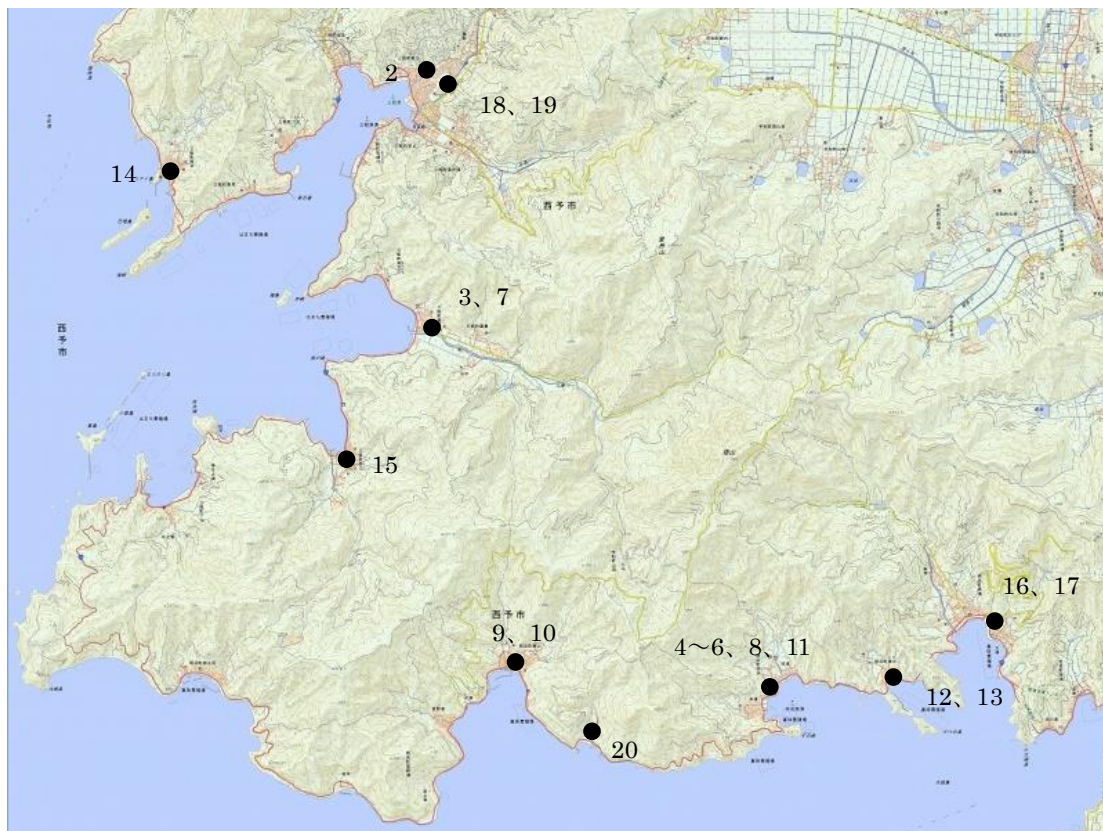


図24 主な文化財の分布（番号は巻末資料6（3）に対応）

歴史文化の特徴(地域:さと)

南予の中核・宇和盆地

概要 宇和盆地は先史・古代から稲作と周辺との交流を背景に、南予の中核としての役割を果たしました。中世には西園寺氏の支配下にあり、近世には在郷町、宿場町、四国遍路札所の門前町として発展し、近代以降の発展の礎を築きました。

地域：さと／歴史文化の特徴：南予の中核・宇和盆地

■ (4) 南予を代表する初期稲作文化と古墳文化¹⁰

¹⁰ 愛媛大学考古学研究室編 2002『陶質土器の受容と初期須恵器の生産』愛媛大学考古学研究室、下條信行（研究代表者）2004『西南四国―九州間の交流に関する考古学的研究』、愛媛大学考古学研究室編 2004『西南四国の歴史と古代ロマンの里構想の今』西予市・西予市教育委員会・愛媛大学考古学研究室、村上恭通編 2009『考古学からみた古代の宇和盆地』愛媛大学考古学研究室・西予市教育委員会、村上恭通編・下條信行監修 2017『笠置峠古墳』西予市教育委員会・愛媛大学考古学研究室などを参考にしています。

四国西南部と九州との間には縄文時代から交流があったことが知られており、これを下地として、弥生時代前期初頭に宇和盆地に稲作が伝播しました。稲作伝播後も安定した生活が営まれ、前期を通じて宇和盆地に稲作が定着していったと考えられます。こうした動きが落ち着きを見せた弥生時代前期末から中期初頭になると、各地で地域独自の文化が形成され始めます。四国西南部においては、縄文時代の刻目突帯文土器きざみめ とつたいもんに祖型を持つ在地色の強い西南四国型土器が登場し、独自の文化圏が形成されました。在地色が強いとは言っても没交渉ではなく、瀬戸内の凹線文おうせんもんや九州豊後系の土器が出土しているように、周辺各地との交流は継続されていました。弥生時代後期になると、宇和盆地の遺跡数は増加し、土器に中予地域の影響が強まることが確認されています。従来からの九州との交通ルートを通じて銅矛形祭器がもたらされますが、瀬戸内系の平形銅剣が流入するものも、こうした動きと軌を一にしています。このように弥生時代を通じて遺跡が営まれる地は南予において他になく、稲作と九州、瀬戸内などとの交流をもとに、宇和盆地は南予の中核としての役割を果たしたものと考えられます。

こうした背景のもと、宇和盆地では笠置峠古墳をはじめとする古墳時代前期の前方後円墳が3基築造され、以後も鉄製甲冑を出土した古墳時代中期の岩木赤坂古墳、後期のナルタキ古墳群、檜木駄場古墳群などが築造されました。また、上井遺跡の市場南組窯系須恵器、大江垣内古墳出土の双龍環頭柄頭は古墳時代における宇和盆地の交流を伝えます。さらに、安養寺裏山古墳の方格T字鏡、伊勢山大塚古墳や河内谷遺跡の陶質土器、伝長尾古墳出土の袋状鉄斧など、大陸や朝鮮半島由来の文物も入手していることから、古墳時代の宇和盆地に東アジア世界とのつながりのある人々が存在したことをうかがい知ることができます。

古代には7世紀代の方墳と考えられる東大谷古墳が築造されました。藤原宮や平城京などから出土した木簡からは、7世紀後半代に宇和評が成立したことや8世紀初頭以降に宇和郡が置かれたことがわかっています。また歴史地理の立場からは、宇和盆地に条里が敷かれたことが明らかにされています。古代宇和郡の郡衙¹¹は未発見ですが、瓦基壇の一部や緑釉陶器、赤色塗彩土師器、鞆羽口などが検出された西ノ前遺跡、掘立柱建物に石帯、鋳銅用折れ羽口や埴塼などが出土した坪栗遺跡、掘立柱建物や墨書土器、転用硯などが出土した国木遺跡などの存在から、古代宇和郡の中心も引き続き宇和盆地に置かれたものと考えられます。

以上、南予を代表する初期稲作文化と古墳文化、そして律令国家成立前後にも宇和盆地が南予の中核としての役割を果たしたことを伝える遺跡や考古資料が豊富に残されています。

す。

¹¹ 郡の役所。

第3章 西予市の歴史文化の特徴



西南四国型土器



坪栗遺跡の木製農具



銅矛（市指定）



笠置峠古墳（県指定）



ナルタキ古墳群（市指定）



双龍環頭把頭（市指定）



蕨手刀（市指定）



国木遺跡

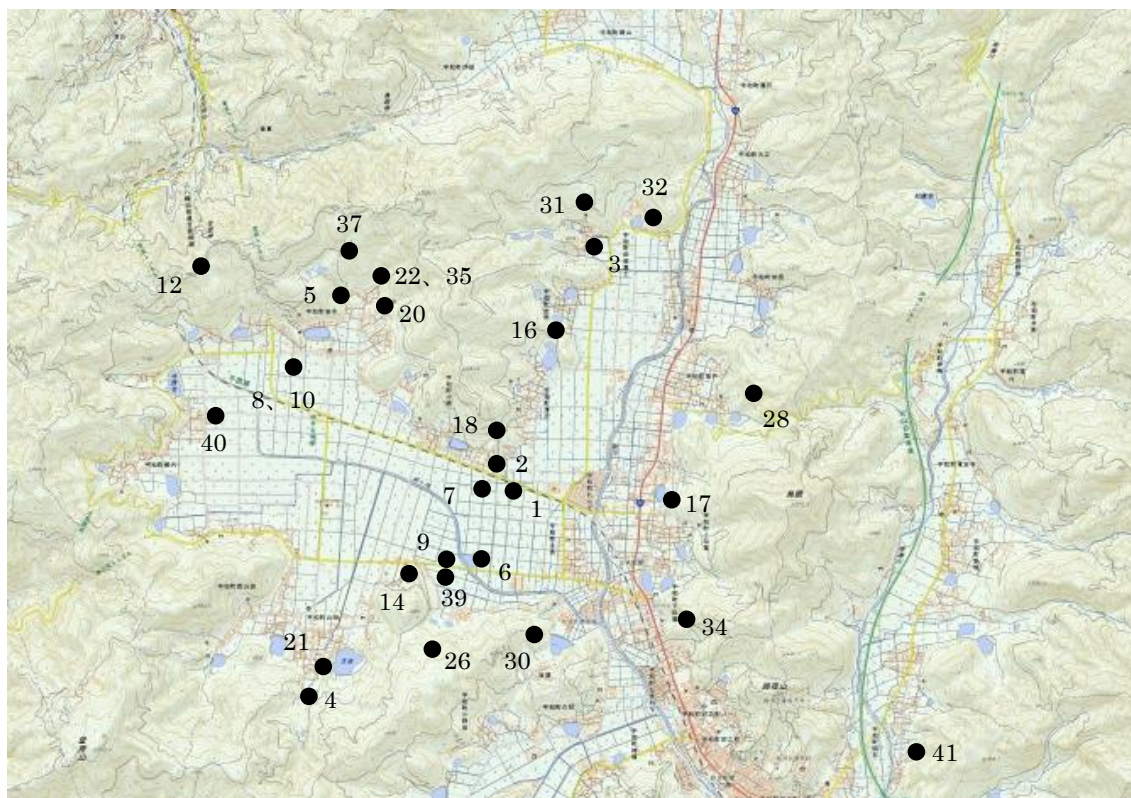


図 25 文化財の分布（番号は巻末資料 6（4）に対応）

地域：さと／歴史文化の特徴：南予の中核・宇和盆地

■ (5) 西園寺氏による宇和郡の支配¹²

鎌倉時代、伊予国の知行国主となった西園寺氏は、伊予国最大の荘園宇和荘を手に入れ自らの経済基盤の一つとしました。その後、時期ははっきりしませんが西園寺氏の分流が宇和に下向し、宇和郡に影響を及ぼすようになりました。しかし宇和郡は広大かつ複雑な地形を呈しており、しかも御荘氏、津島氏、河原淵氏、土居氏、北之川氏、法華津氏等の在地の国人領主が領地支配を行い一定の独自性を見せるなど、西園寺氏の宇和郡支配は盤石のものとはいえませんでした。

南予最大の戦いである永禄 11 年（1568）年の鳥坂合戦をはじめとして、16 世紀後半には九州大友、土佐一条・長宗我部等からたびたび侵攻を受けるなど、宇和盆地では騒乱が絶えませんでした。そのため宇和盆地には、領主西園寺氏の居城である松葉城、黒瀬城をはじめ、数多くの山城や砦が築かれました。

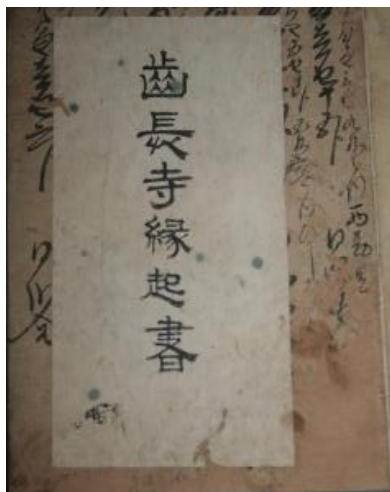
天正期の長宗我部の伊予侵攻に伴い、現在の野村、城川の主要な山城は落とされ、天正 13

¹² 愛媛県歴史文化博物館編 2007『戦国南予風雲録』、2020『戦国乱世の伊予と城』、2021『明石寺と四国遍路』（すべて愛媛県歴史文化博物館発行）などを参考にしています。

第3章 西予市の歴史文化の特徴

年（1585）長宗我部氏と講和した西園寺氏は黒瀬城を下城し、西園寺氏の支配は終焉を迎えました。

記録が限られるなか、山城や寺社の資料が南予の騒乱の時代を物語ります。



歯長寺縁起（国指定）



黒瀬城



松葉城



絹地月星紋陣旗（市指定）



西園寺公広像



金幣

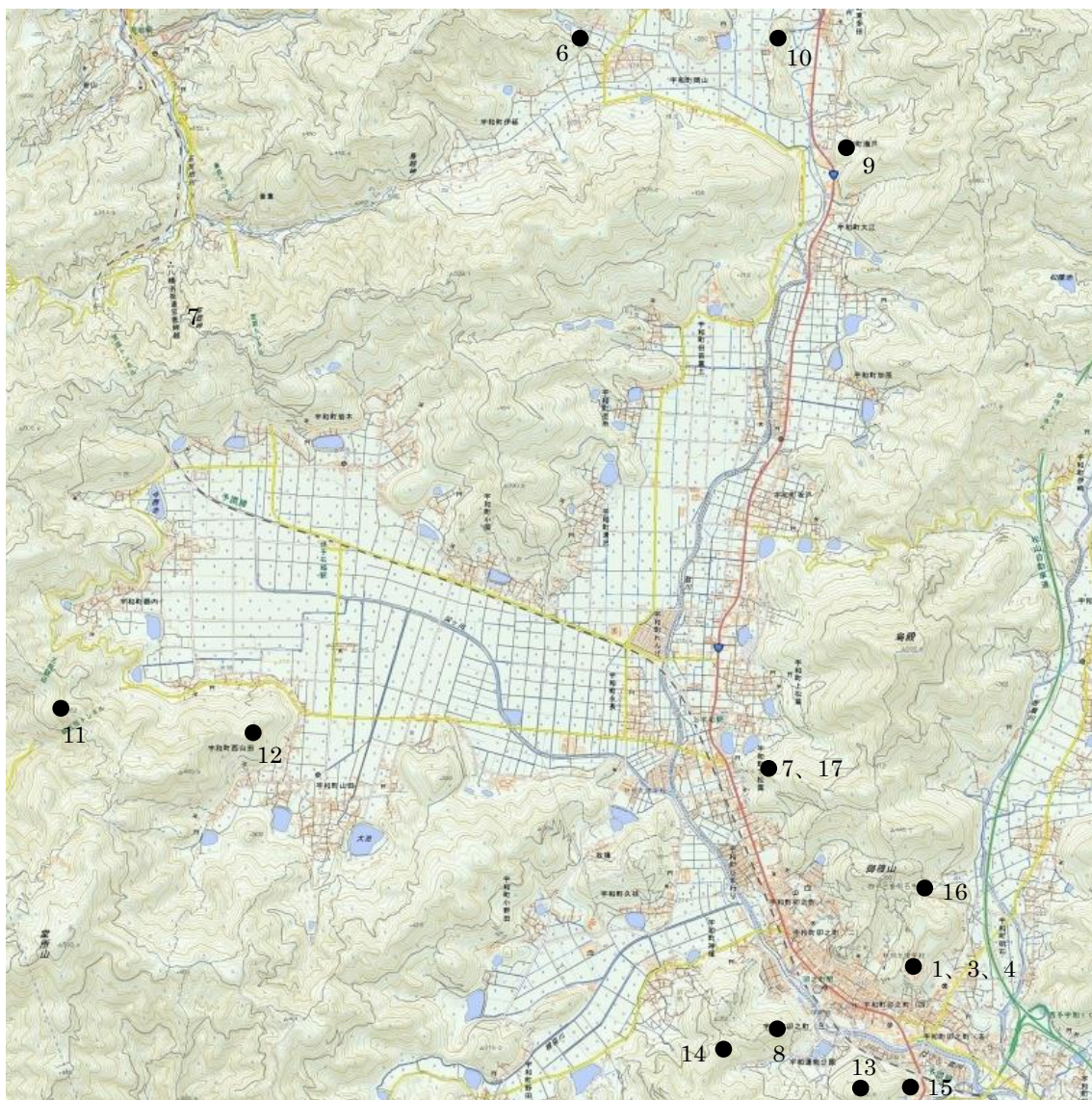


図26 文化財の分布（番号は巻末資料6(5)に対応）

地域：さと／歴史文化の特徴：南予の中核・宇和盆地

■ (6) 交通の要衝・宇和盆地¹³

宇和盆地は宇和島藩に属し、宇和島と大洲を結ぶ街道の中間に位置し、さらに南予の要港

¹³ 宇和郷土文化保存会人物伝編纂委員会編 1933『宇和の人物伝』宇和町教育委員会、宇和郷土文化保存会、愛媛県生涯学習センター編 1993『宇和海と生活文化』同センター、開明学校整備検討委員会編 1996『開明学校の歴史』宇和町教育委員会、愛媛県歴史文化博物館編 1997『伊予の蘭学』同館、大阪市立大学住環境講座編 1998『宇和町卯之町伝統的建造物群保存対策調査報告書』宇和町、愛媛県教育委員会編 2012『八幡浜街道』愛媛県教育委員会、(公財)愛媛地域政策研究センター編 2013『愛媛県の近代化遺産』愛媛県教育委員会などを参考にしました。

八幡浜や在郷町野村との結節点に当たる交通の要衝にありました。こうしたことから、黒瀬城の対岸山麓に営まれた松葉町は宇和島藩の在郷町、街道の宿場町として栄え、のちに名を変え卯之町と呼ばれるようになりました。宝永3年(1706)編纂の『大成郡録』では、家数127軒、人口630人、牛4頭、馬45頭、荷船5艘、小舟6艘を擁していることがわかります。元禄8年(1695)の『元禄検地帳』では、現在の中町、下町に該当すると思われる屋敷地が107筆書き上げられており、計画的な地割に基づき町が形成されていたことがうかがえます。天明8年(1788)の記録には複数の酒造家の名前が挙がっており、天保12年(1840)の『天保検地帳』からは、道を挟んで両側に屋敷地が並ぶ姿と、中町と下町に商人が多く居住していた様子が復元されています。「天保時代の卯之町全景図」には、武士、町民、商人、僧侶や四国遍路など多様な人々が歩く様子が描かれています。四国八十八箇所霊場第43番札所明石寺の門前町であったことも、町の発展を利したものと思われる。

宇和盆地と周辺との往来には、鳥坂峠(大洲)、^{はなが}齒長峠(宇和島)、法華津峠(吉田・宇和島)、笠置峠(八幡浜)などを越えなければならず、在地の人々のみならず、商人、遍路¹⁴、時には参勤交代の藩主や蘭学者も峠を行き交いました。

長崎でシーボルトに学んだ蘭学者・二宮敬作は、シーボルト事件をきっかけとして、温泉岳(雲仙岳)を測量したなどの罪で文政13年(1830)に長崎から追放されました。天保4年(1833)藩主宗紀の内命もあり卯之町で開業。シーボルトとタキの間に生まれたイネは、敬作を頼って卯之町を訪れ、敬作のもとで蘭学、医学を学んだとされます¹⁵。また、嘉永2年(1849)逃亡中であった高野長英が敬作のもとを訪れ、卯之町に潜伏しました。敬作は同3年薬草園を開き、同5年には藩の許しを得て卯之町で種痘を行っています。翌年宇和島に来藩した村田蔵六とも親交があり、安政元年(1854)の蔵六、前原巧山の長崎出張に同行し、長崎に居たイネを卯之町に連れ帰りました。敬作は塾を開き教えを乞う若者たちを指導し、その中には後にイネの娘タカ(高子)と結婚する三瀬周三(諸淵)もいました。

敬作の薫陶を受けた若者たちは、養蚕、製茶、金融などの産業振興のほか、申義堂や開明学校の建設などを通じて、幕末から近代の卯之町の発展に貢献しました。近代の卯之町には、役所・役場、郵便局や邏卒屯所、裁判所の出張所などが置かれ、東宇和郡の行政の中心地としての役割を担いました。

観光の中心的存在の一つでもある卯之町の町並みには、この町を舞台に学び生活した人々と、宇和盆地を往来した人々の様子が伝えられています。

¹⁴ 八幡浜街道笠置峠越には、豊後、筑前、肥後など九州の遍路の墓が多く祀られています。

¹⁵ イネが卯之町を訪れた年齢には諸説あります。石山禎一氏(元東海大学総合教育センター講師)は、母タキがシーボルトに宛てた手紙から、イネが卯之町を訪れた年月は1845(弘化2)年2月(イネ18歳、敬作41歳)の可能性が高いと指摘しています。

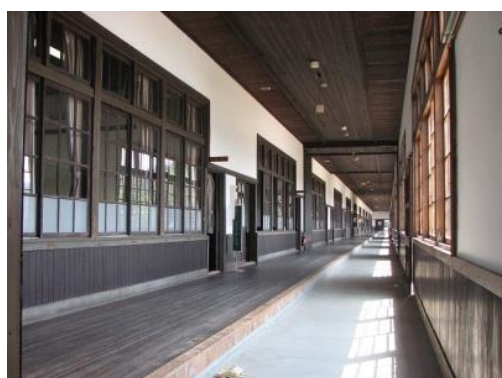
第3章 西予市の歴史文化の特徴



申義堂（市指定）



旧開明学校校舎（国指定）



旧宇和町小学校第1校舎（市指定）



伊予遍路道（明石寺境内）（国指定）



天保時代の卯之町全景図（市指定）



西予市宇和町卯之町重建地区



大洲藩鳥坂口留番所（市指定）



八幡浜街道笠置峠越（国指定）

第3章 西予市の歴史文化の特徴



榜示石（市指定）



三瓶隧道（国登録）

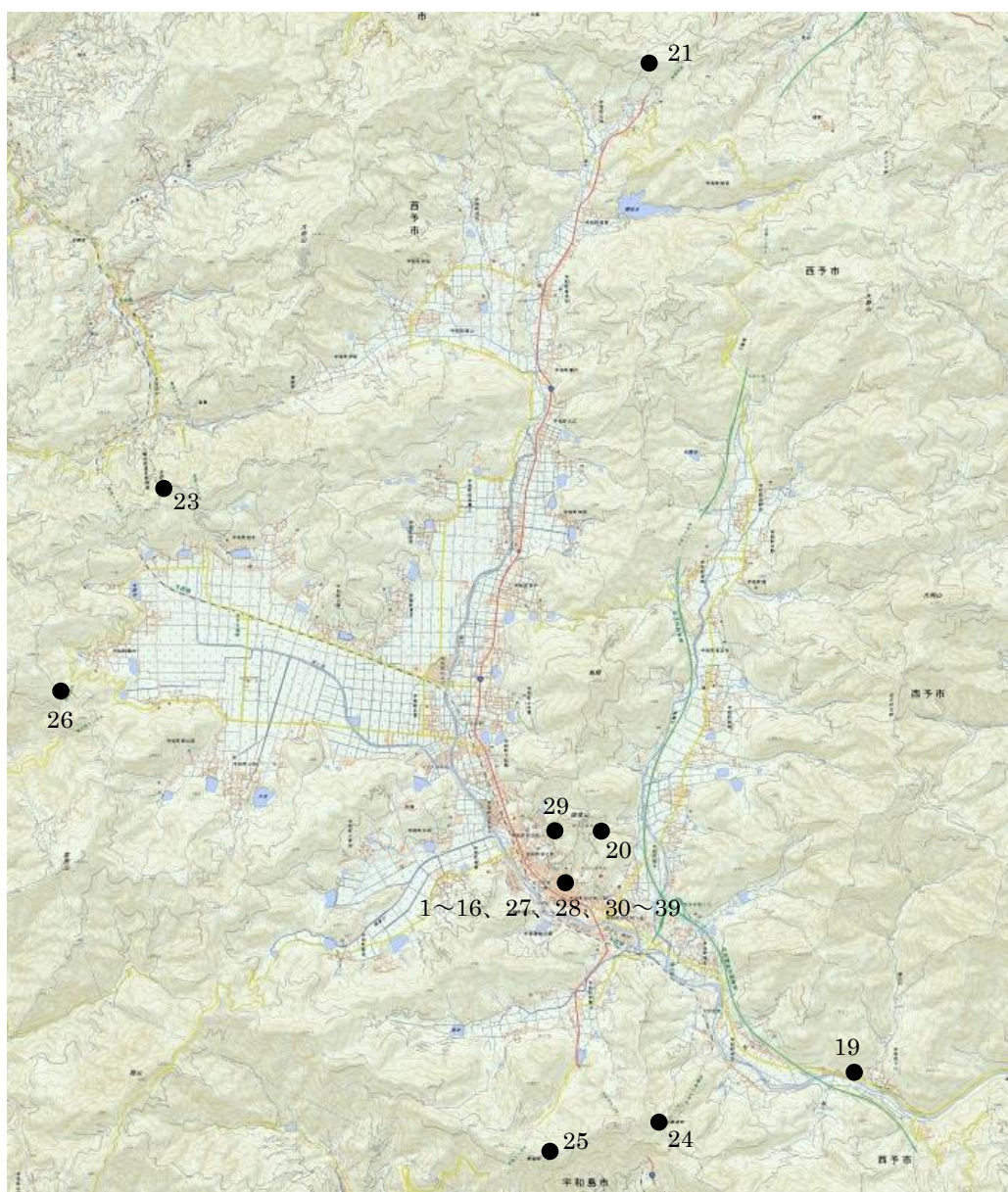


図27 文化財の分布（番号は巻末資料6（6）に対応）



図28 文化財の分布（番号は巻末資料6(6)に対応）

歴史文化の特徴（地域:やま）

山間地農業と茶堂のある農山村

概要 藩政期から泉貨紙生産や櫛栽培が盛んで、峠を介した土佐との交流や肱川を介した物資の運搬が盛んに行われました。こうしたなか、茶堂の接待文化、虫送りや花取り踊り、念仏踊など山間部独特の文化を育んできました。

地域：やま／歴史文化の特徴：山間地農業と茶堂のある農山村

■ (7) 山間部の農業と手工業¹⁶

西予市には縄文時代の洞穴・岩陰遺跡が多く、穴神洞遺跡や中津川洞穴遺跡などからは、洞穴や岩陰を生活の場としながら、周辺の山野で狩猟採集を行った様子がうかがえます。

藩政期には野村の兵頭太郎右衛門が発明したと伝わる泉貨紙の製造と櫛の栽培が奨励されました。安政4年（1857）の野村組の泉貨紙手漉き業者は864人、山奥組524人、川

¹⁶ 愛媛県教育委員会編 1993『県境山間部の生活文化』愛媛県、篠原重則 1997『愛媛県の山村』愛媛文化双書刊行会、文化庁文化財部記念物課 2005『農林水産業に関する文化的景観の保護に関する調査研究報告書』文化庁文化財部記念物課、黒河高茂 2010『大野ヶ原に生きる』アトラス出版などを参考にしました。

第3章 西予市の歴史文化の特徴

原淵組 307 人とあります。藩は重要な財源の一つと位置付け、原料となる楮の他領への販売を禁じたり、紙の専売にも乗り出したりしました。山間部では、ため池を整備し米も作られましたが、平地が少ないため畑地が多く、雑穀、榎、茶などが栽培されました。焼畑は近世から一定程度見られましたが、近代以降に特に盛んになり、雑穀、トウキビ、三椏などが栽培されました¹⁷。

宇和島藩の自然条件は低生産性と零細性を持つことが指摘されており、泉貨紙、楮、榎の専売や統制による負担などもあって農民の生活は決して楽ではなかったと考えられます。村によっては耕作する者のいない中地^{なかつち}が増え、希望者を移住させる入百姓^{いりびやくしやう}の取組が当初はその地の庄屋を中心に進められました。また当地では百姓一揆が多く発生したと言われています。

明治末期から終戦ころにかけて、愛媛県は西日本有数の養蚕県でした。野村では昭和 5 年（1930）からの養蚕不況で大打撃を受けながら戦後も養蚕を続け、野村産の「伊予生糸」は伊勢神宮や皇室の御料糸として採用され、平成 28 年（2016）に農水省の地理的表示保護制度に基づく産品に登録されています。

戦後の壮絶な開拓とブナ林の保存運動で知られる大野ヶ原は、県下屈指の酪農地帯へと成長しました。

山間地の限られた自然条件を活かし克服しながら産物を生み出し、より豊かに暮らそうと生きてきた人々の営みによって現在のくらしが成立していることを知ることができます。



惣川土居家（市指定）



鏝絵（城川歴民蔵）

¹⁷ 窪野村（現西予市城川町）における元禄 8 年（1695）の畑全体の広さに占める焼畑の割合は 10.89% で（『元禄八年高附帳宇和郡山奥組窪野村』）、明治 9 年（1876）では 44.82%（『明治九年畝順帳伊予国宇和郡窪野村』）というデータがあります（西予市城川文書館の別宮博明氏のご教示による）。

第3章 西予市の歴史文化の特徴



泉貨紙製造技術者 菊地孝（国選択・市指定）



泉貨居士の墓（県指定）



茶堂と農山村景観



四国カルスト大野ヶ原

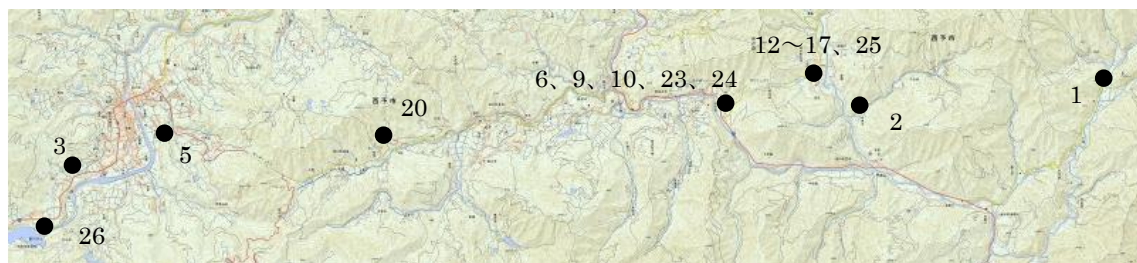


図29 文化財の分布（番号は巻末資料6（7）に対応）

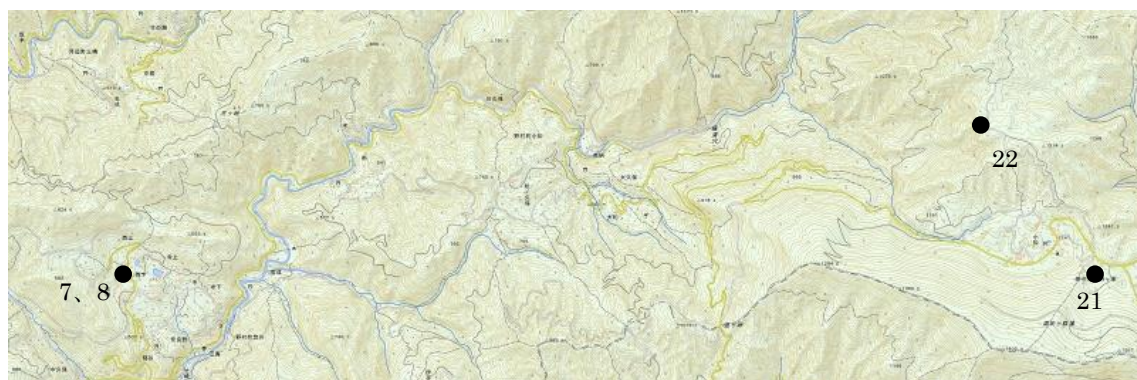


図30 文化財の分布（番号は巻末資料6（7）に対応）

地域：やま／歴史文化の特徴：山間地農業と茶堂のある農山村

■ (8) 伊予と土佐の交流¹⁸

当市の山間部は、土佐国境に接していることから、戦国時代の国人領主たちは宇和郡の最前線にあって生き残りをかけた難しい選択を迫られる場面も多かったものと思われます。永禄12年(1569)甲ヶ森城主・長山伯耆守は、東表の合戦に勝利した土佐一条氏から「切敷」六町を与えられます。天正期には北之川氏(三滝城主、紀氏)、魚成氏(隆ヶ森城主)が長宗我部氏に内通し、菅田氏と連携して西園寺を包囲したとされます。また、北之川親安は元親と姻戚関係を持ちますが、天正11年(1583)の長宗我部の伊予侵攻により滅亡。惣川、甲ヶ森城、猿ヶ岳城(肱川)、白岩城、白木ヶ城なども攻め落とされました。なお、元龜3年(1572)豊後大友氏の宇和侵攻で総大将を務めた佐伯惟教は、弘治3年(1573)に豊後を退去し、西園寺氏の庇護を受け野村宇都宮氏の被官となりました。その子孫は野村宇都宮氏に代わって白木ヶ城主となり、緒方氏と称しました。

野村は葦ヶ峠(小松)、城川は桜峠(野井川)、大茅峠(窪野)、九十九曲峠¹⁹(川津南)といった複数の峠を介して土佐禰原との往来がありました。藩政期には人や物資の集まる惣川が栄え、惣川から上浮穴方面に抜けるルートもありました。天明8年(1788)の惣川村騒動では、飢饉で困窮した農民70名が徒党して大洲領古田村(現内子町)へ逃散、文化13年(1816)の村前村(現内子町)の農民14人が惣川村に逃散するといったように峠越えの往還を利用した移動もみられました。

近代には土居が大きく発展しました。禰原から茶、木材、楮、三椏、櫛などを集め、伊予からは米、醤油、酒、砂糖、塩、雑魚、日用品などが運ばれました。『禰原町史』には、明治維新以降、塩は五十崎まで行かないとないので度々買いに行き、塩漬けの海魚は伊予三津浜から、雑魚売りは俵津、狩浜から売りに来たということが記されており、明治から大正期にかけて、禰原の人々が川津南へ酒を買いに来たといったような話も残ります。土居からは高川経由で北宇和との往来もありました。

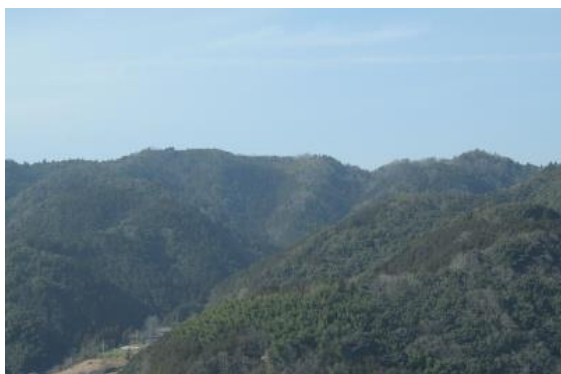
野村、城川と大洲方面との肱川を介した交流も盛んで、山間部で栽培された楮や三椏は和紙生産の盛んな大洲へ、櫛実は木蠟生産の盛んな内子へと肱川の舟運を活かして運ばれました。木材は、坂石や硯(肱川)などの河港まで運ばれて筏を組んで長浜まで、大正期以降は繭や木炭が大洲方面へ搬出されました。筏師は、最盛期で坂石組に46人、横林組に34人おり、肱川本川筋、小田川筋で257人いました。

豊富な山城や山間部の町並み、峠道、茶堂などが、四国山地と肱川を介した交流の様子を今に伝えます。

¹⁸ 横山昭市 1988『肱川 人と暮し』(財)愛媛県文化財振興財団、愛媛県教育委員会編 1993『県境山間部の生活文化』愛媛県、篠原重則 1997『愛媛県の山村』愛媛文化双書刊行会、愛媛県教育委員会編 2011『禰原街道』愛媛県教育委員会などを参考にしました。

¹⁹ 禰原街道葦ヶ峠越と禰原街道九十九曲峠越は、いずれも幕末に土佐を脱藩した志士たちがたどった道とされています。

第3章 西予市の歴史文化の特徴



甲ヶ森城（市指定）



岩本将監の墓（市指定）



惣川の町並み



惣川の盆川



土居の町並み



坂石の町並み



船戸川橋



九十九曲峠

第3章 西予市の歴史文化の特徴

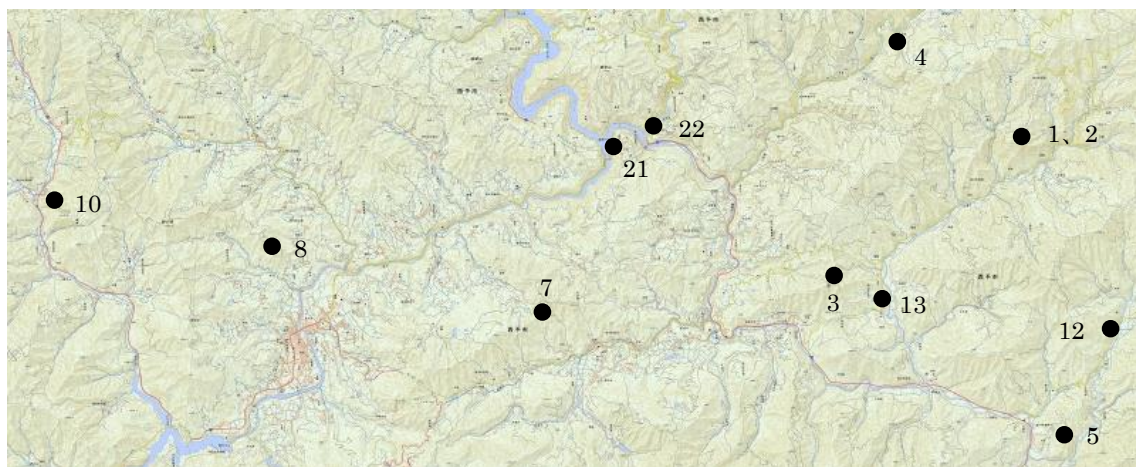


図 31 文化財の分布 (番号は巻末資料 6 (8) に対応)

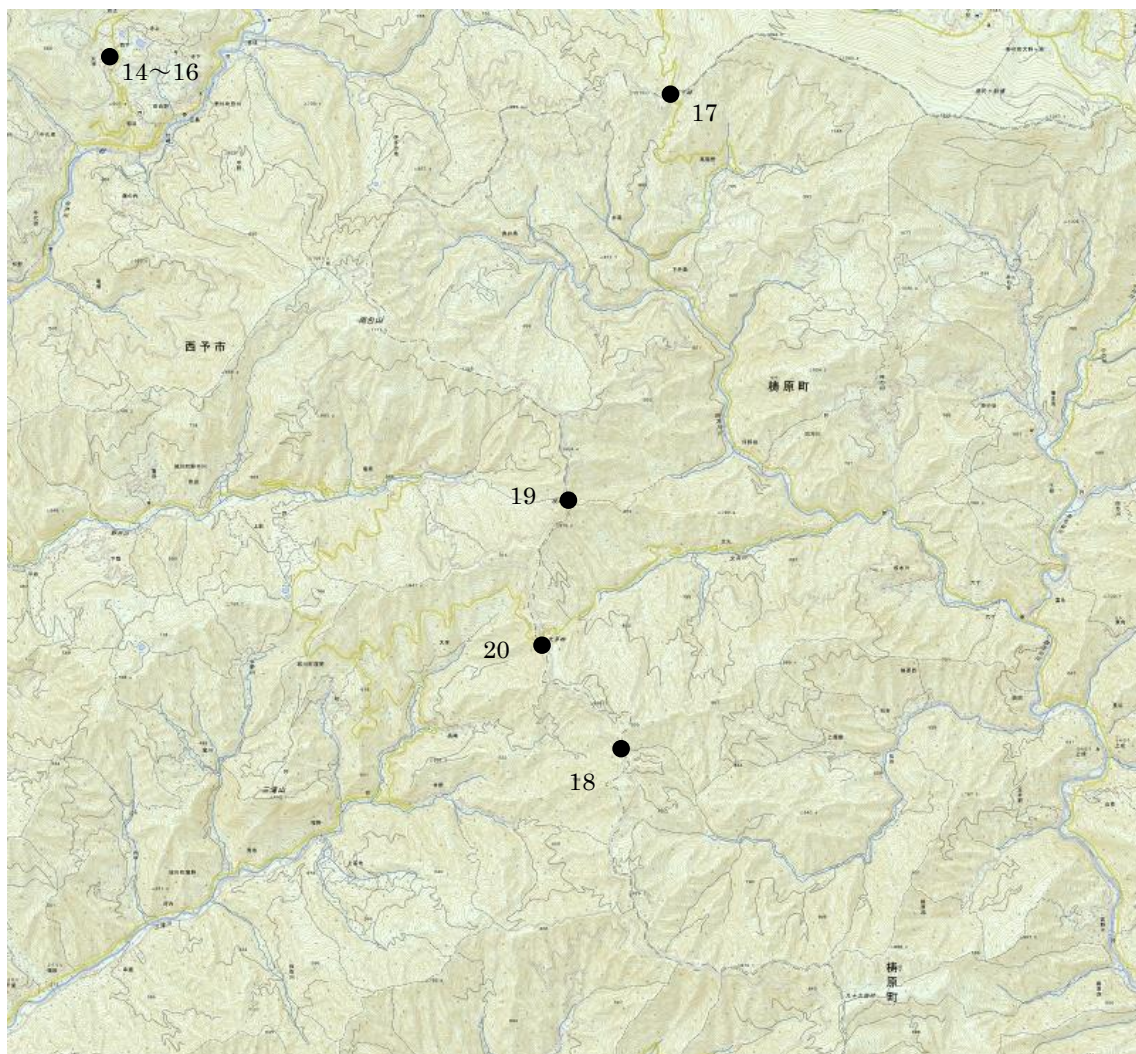


図 32 文化財の分布 (番号は巻末資料 6 (8) に対応)

地域：やま／歴史文化の特徴：山間地農業と茶堂のある農山村

■ (9) 農山村の祈り²⁰

当市の山間部では、旧道沿いの村境に、一間四方宝形造^{ほうぎょうづくり}で正面に弘法大師像を安置する辻堂が設けられています。旅行者や通行人に茶の接待を行うことから主に茶堂と呼ばれ、念仏や虫送りなどの年中行事でも利用されています。土佐では、16世紀末の『長宗我部地検帳』にまでさかのぼることができるとされ、『地検帳』には茶屋・茶屋堂・茶屋ヤシキ・茶庵・茶庵堂などと記録されています。また、その多くは海岸地に近い東西を通る古くからの主要道路周辺(札所も多い)に集中しており、高岡郡、幡多郡など現在の分布域と重なるところもあるとされています。

翻って伊予では、当市の野村、城川、旧河辺村、旧肱川町、旧大洲市などの山間に多く²¹、旧道沿いに分布しています。建造物としてみると、土佐の茶堂が間口三間(5.4m)×奥行二間(3.6m)のものが多いのに対し、当市の茶堂の大半は一間(1.8m)四方と小さい点、また土佐の茶堂には床面に土間を切り込むものや内部に囲炉裏が敷設されるものもある点などに違いがみられます。

近代、城川の茶堂では、旧暦7月²²を中心に土佐と伊予を行き交う行商人や駄賃持ち、一般の通行人、遍路などに対して、湯茶のほか大豆の煮もの、梅干し、漬物、炒り豆、もち米を炒ったものなどでの接待が行われました²³。行商人や遍路が茶堂に宿泊することもありました。また茶堂は、実盛送り(虫送り)や念仏などの年中行事の拠点でもありました。さらに、農作業の休憩や情報交換の場でもあったようです。しかし、道路整備や自動車の普及など交通事情の変化とともに茶堂での接待は廃れ、人口減少や後継者不足で年中行事も存続の危機にあります。茶堂自体も瓦葺きなどへ変更するケースが見られますが、茶堂は山村景観を構成し地域の歴史や民俗を伝えるものであることから²⁴、当市では近年、茅葺きの技術継承を含めて茅葺き茶堂を残そうとする取組が進められています。

花取り踊りは、土佐から伊予へ伝わった芸能の一つで、現在は野村町岡成^{おかなる}と城川町下相^{おりあい}に

²⁰ 文化庁文化財保護部編 1989『茶堂の習俗 I』財団法人国土地理協会、愛媛県教育委員会編 1993『県境山間部の生活文化』愛媛県、文化庁文化財部記念物課 2005『農林水産業に関する文化的景観の保護に関する調査研究報告書』文化庁文化財部記念物課、(公財)全日本郷土芸能協会編 2016『増田の花取り踊り調査報告書』文化庁文化財部伝統文化部などを参考にしました。

²¹ 数は少ないものの、旧伊方町、旧菊間町、旧波方町、旧関前村などの海岸部にもあるとされています(文化庁文化財保護部編 1989 前掲)。

²² 新暦で7月下旬から9月前半頃。

²³ 高野子村庄屋芝家文書『勤方家業記』(安永8年(1779))には、旧暦七夕の日に辻堂での接待におはぎを用意するようにと申し送りした一文があります(西予市城川文書館・別宮博明氏のご教示による)。

²⁴ 別宮氏によると、明治9年窪野村において地目に「堂宇敷地」「堂宇敷」と記されている土地が19か所あり、うち川後岩茶堂や片平茶堂など現存する茶堂の敷地と思われる土地が8か所あるといえます(『明治九年窪野村反別畝順帳』)。残り11か所のうち1か所は林庭院(市指定)の可能性があり他10か所が茶堂だとすれば、明治9年には現在の倍以上の茶堂が存在したことになります。

第3章 西予市の歴史文化の特徴

残されています²⁵。このほか当市山間部には、天明4年(1784)以来守られ民間の講行事を統合した城川遊子谷の神仏講の習俗、土居の御田植行事、三滝神社の春季例祭に奉納される窪野の八ツ鹿踊り、楽念仏(念仏踊り)など、独特の年中行事、伝統芸能が数多く遺されています。このほか、嘉永5年(1852)の大火を受け火鎮を祈願した乙亥大相撲は、戦時中も絶えることなく毎年開催されています。



伊予の茶堂の習俗 (国選択)



下相の花取り踊り (市指定)



実盛送り (市指定)



川津南楽念仏 (市指定)



窪野の八つ鹿踊り (国選択)



遊子谷の七鹿踊り (県指定)

²⁵ 城川ではかつて川津南、下相、嘉喜尾、魚成、田穂にあったとされています((公財)全日本郷土芸能協会編2016『増田の花取踊調査報告書』文化庁文化財部伝統文化課)。

第3章 西予市の歴史文化の特徴



土居の御田植行事（県指定）



龍澤寺（市指定）

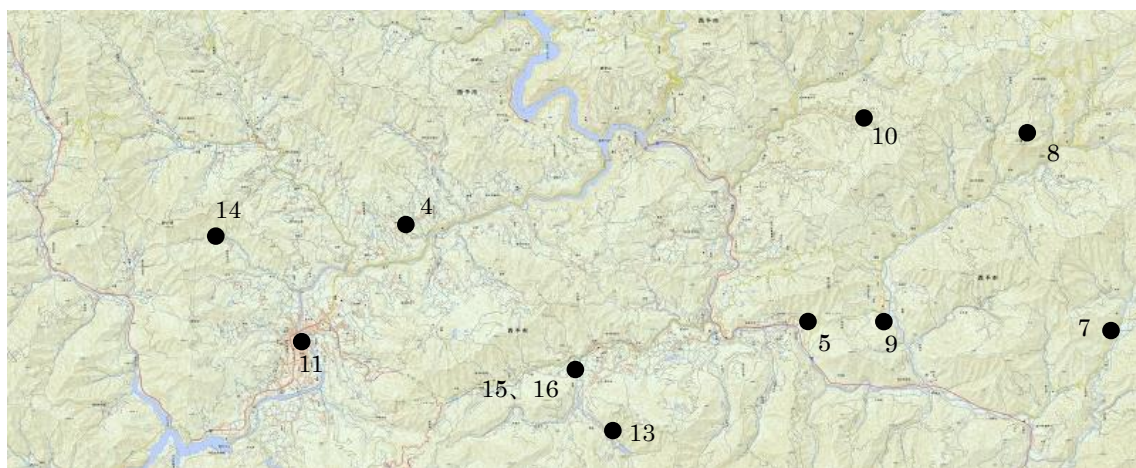


図 33 文化財の分布²⁶（番号は巻末資料 6（9）に対応）



図 34 文化財の分布（番号は巻末資料 6（9）に対応）

²⁶ 城川の茶堂の分布については、インターネット上で公開されている次のページが詳細でわかりやすいです（「城川茶堂群」）。

<https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1KMA7HsrYxd2zL0PvSKMKrKvbV98&hl=ja&ll=33.397109678970644%2C132.74968149999998&z=13>